

一 般 講 演

1. 水銀親和反応の再検討

関西医科大学第1病理
金沢浩吉, 前田隆英, 伊原信夫

水銀親和反応はパラフィン切片において、コロイド様色素以外に脾臓チモージェン顆粒、耳下腺導管部、皮膚角質層、毛根皮質、外根鞘等に於ても陽性を呈することが見出されたが、他方これらの組織はチオグライコール酸前処理後のSH基証明法陽性部位でもある。しかもSH基の組織化学的証明法の中には水銀塩とSH基とのmercaptide形成を原理とする方法もみられるので水銀親和反応に用いられる硝酸水銀が不飽和基と結合するほかSH基ともmercaptide形成反応を行うか否かを検討した。

SH基証明改良法である前田・伊原のコロイド鉄法陽性の切片についてチオグライコール酸処理後水銀親和反応を行うとその陽性度がコロイド鉄法の場合と反対に却つて減弱することが判った。また昇汞処理によりコロイド鉄法は全く封鎖されるのに反して水銀親和反応は同処理により影響を受けなかった。これらの結果から水銀親和反応はSH基と反応せず、不飽和基と特異的に反応すると考えた。

2. 磷脂質及びスフィンゴ脂質の組織化学

京都大学結核胸部疾患研究所細胞化学
○高松英雄・前田美世

磷脂質及びスフィンゴ脂質の組織化学的染色法として従来知られているものは、主として経験的結果によるもので、理論的には詳らかでないものが多い。我々の現在使用している方法では2点で特異である。第一に、塩化マグネシウム飽和アセトン処理によって、凍結切片の磷脂質、スフィンゴ脂質のみを保存して他の脂質を完全除去することを計ったこと。第二にはズダン黒をアルコールではなくアセトン溶液として、これを染色に使用したことである。その他若干の考案を加えて実施している。

マックマナス氏のズダン黒によるミエリン鞘の染色法がある。結果的には、よく似ているが、内容的には我々の方法の方が、より明瞭であると思う。